

戦国策卷第四

秦二

五十三、齊助楚攻秦

齊、楚を助けて秦を攻め、曲沃を取る。其の後、秦、齊を伐たんと欲す。齊・楚の交り善し。惠王之を患いて、張儀に謂いて曰く、「吾、齊を伐たんと欲すれども、齊・楚、方に歡す。子、寡人の為に之を慮ること奈何する。」張儀曰く、「王、其れ臣の為に車、并に幣を約せよ、臣請う、之を試みん。」張儀南して楚王に見えて曰く、「弊邑の王の説ぶ所甚だしき者は、大王よりも大なるは無く、唯だ儀が甚だ臣為るを願う所の者も、亦た大王より大なるは無し。弊邑の王の甚だ憎む所の者は、齊王より大（札記：「先」を鮑本は「大」に作る。鮑は「亦」の字を衍とす）なるは無く、唯だ儀が甚だ憎む者も、亦た齊王より大なるは無し。今、齊王の罪、其れ弊邑の王に於けるや、甚だ厚く、弊邑、之を伐たんと欲すれども、而るに大國、之と歡す。是を以て弊邑の王、事うることを令（よし）くすることを得ず、儀は臣と為るを得ざるなり。大王苟に能く關を閉じて齊に絶たば、臣請う、秦王をして商・於の地方六百里を獻ぜしめん。此くの若くせば、齊は必ず弱からん、齊弱くば則ち必ず王の為に役せん。則ち是れ北は齊を弱めて、西は秦に徳し、而して商・於の地を私し以て利と為すなり、則ち此れ一計にして三利俱に至るなり。」楚王大いに説び、之を朝廷に宣言して、曰く、「不穀（王の一人称）、商・於の地（田を地に改める）方六百里を得たり。」群臣の聞見する者畢く賀す。陳軫後れて見え、獨り賀せず。楚王曰く、「不穀、一兵をも煩わさず、一人をも傷わず、而して商・於の地六百里を得たり、寡人自ら以て智なりと為す。諸士大夫皆な賀すに、子獨り賀せず、何ぞや。」陳軫對えて曰く、「臣、商・於の地、得可からずして、患の必ず至らんを見るなり。故に敢て妄りに賀せざるなり。」王曰く、「何ぞや。」對えて曰く、「夫れ秦の王を重んじる所以は、王の齊を有するを以てなり。今、地未だ得可からずして齊先ず絶たば、是れ楚、孤なるなり。秦、又た何ぞ孤の國を重んぜん。且つ先に地を出だし齊に絶つは、秦の計必ず為さざらん。先に齊に絶ち後に地を責（もとめる）むれば、且に必ず欺きを張儀に受けんとす。欺きを張儀に受くれば、王必ず之を惋（うらむ）みん。是れ西は秦の患いを生じ、北は齊の交わりを絶つ。則ち兩國の兵は必ず至らん。」楚王聽かず、曰く、「吾が事は善し。子其れ口を弭（やめる）めて言う無かれ、以て吾が事を待て。」楚王、人をして齊に絶たしむ。使者未だ來たらざるに（來は還）、又重ねて之に絶つ。張儀、秦に反り、人をして齊に使いせしめ、齊・秦の交り陰かに合す。楚因りて一將軍をして地を秦より受けしむ。張儀至るや、病と稱して朝せず。楚王曰く、「張子、寡人が齊に絶たざると以えるか。」乃ち勇士をして往きて齊王を詈らしむ。張儀、楚の齊に絶つを知るや、乃ち出でて使者を見て曰く、「某従り某に至るまで、廣從六里。」使者曰く、「臣、六百里と聞く。六里を聞かず。」儀曰く、「儀は固より以て小人なり、安んぞ六百里を得ん。」使者反りて楚王に報ず。楚王大いに怒り、師を興

し秦を伐たんと欲す。陳軫曰く、「臣は以て言う可きか。」王曰く、「可なり。」軫曰く、「秦を伐つは計に非ざるなり、王因りて之に一名都を賂いて、之と與に齊を伐たんには如かず。是れ我、秦に亡いて償を齊より取るなり。楚國は尚全からずや（事を乎に改める）。王、今、已に齊に絶ち、而して欺きしを秦に責む。是れ吾、齊・秦の交わりを合するなり。固より必ず大いに傷われん。」楚王聽かず。遂に兵を擧げて秦を伐つ。秦と齊とは合し、韓氏、之に従う。楚の兵大いに杜陵に敗る。故に楚の土壤士民、削弱せらるるのみに非ず、僅かに以て亡を救いし者は（亡びる寸前までいったのは）、計、陳軫に失し、過ちて張儀に聽きたればなり。

五十四、楚絶齊齊擧兵伐楚

楚、齊に絶ち、齊、兵を擧げて楚を伐つ。陳軫、楚王に謂いて曰く、「王、地を以て東は齊に解き、西は秦に講ずるには如かず。」楚王、陳軫をして秦に之かしむ。秦王、軫に謂いて曰く、「子は秦の人なり、寡人と子とは故あるなり。寡人不佞にして、國事を親らすること能わざるなり。故に子、寡人を棄てて楚王に事う。今、齊・楚相伐つ、或いは之を救うは便なりと謂い、或いは之を救うは便ならずと謂う。子獨り忠を以て子の主の為に計り、其の餘を以て寡人の為にす可からざるか。」陳軫曰く、「王獨り、吳人の楚に遊べる者を聞かざるか。楚王甚だ之を愛す。病む。故に人をして之を問わしめ、曰く、『誠に病むか、意も亦た思うか（故郷を思うか）。』左右曰く、『臣、其の思うと思わざるとを知らず。誠に思わば則ち將に吳吟せんとす。』今、軫、將に王の為に吳吟せんとす。王、夫の管與の説を聞かざるや。兩虎、人を諍（あらそう）いて鬪う者有り、管莊子、將に之を刺さんとす。管與、之を止めて曰く、『虎は、戾蟲（貪欲な動物）なり、人は甘餌なり。今、兩虎、人を諍いて鬪う、小なる者は必ず死し、大なる者は必ず傷つかん。子、傷つきし虎を待ちて之を刺さば、則ち是れ一擧にして兩虎を兼ねるなり。一虎を刺すの勞無くして、兩虎を刺すの名有り。』齊・楚、今戦う。戦わば必ず敗れん。敗れば、王、兵を起こして之を救え。齊を救うの利有りて、楚を伐つの害無し。計聽（計は計略を立てること、聽は献策に耳を傾けること）に覆逆（覆は裏に隠れているもの、逆は予め量ること）を知る者は、唯だ王のみ可なり。計なる者は、事の本なり、聽なる者は、存亡の機なり。計失して聽過ち、能く國を有つ者は寡し。故に曰く、『計に一二有る者は悖（あやまる）たせ難し、聽に本末を失する無き者は惑し難し。』」

五十五、秦惠王死公孫衍欲窮張儀

秦の惠王死す。公孫衍（犀首、魏人）張儀を窮めんと欲す。李讎、公孫衍に謂いて曰く、「甘茂を魏より召き、公孫顯を韓より召き、樗裡子を國より起こさん

には如かず。三人の者は皆張儀の讎なり。公、之を用いば、則ち諸侯は必ず張儀の秦に無きを見ん。」

五十六、義渠君之魏

義渠（西戎の国）の君、魏に之く。公孫衍、義渠の君に謂いて曰く、「道遠くして、臣、復た過ぎることを得じ、請う、事情を謁げん。」義渠の君曰く、「願わくは之を聞かん。」對えて曰く、「中國、秦に事無くんば、則ち秦且に燒焔（ショウ・ゼツ、山林を焼くこと）して君の國を獲んとす。中國、秦に事有るを為さば、則ち秦は且に輕使（輕装の使者で急使のこと）重幣もて君の國に事えんとするなり。」義渠の君曰く、「謹んで令（教え）を聞かん。」居ること幾何も無くして、五国、秦を伐つ。陳軫、秦王に謂いて曰く、「義渠の君は、蠻夷の賢君なり、王、之に賂いて以て其の心を撫せんに如かず。」秦王曰く、「善し。」因りて文繡千匹・好女百人を以て、義渠の君に遣る。義渠の君、群臣を致して謀りて曰く、「此れ乃ち公孫衍の謂う所か。」因りて兵を起こして秦を襲い、大いに秦人を李帛の下に敗る。

五十七、醫扁鵲見秦武王

醫扁鵲、秦の武王に見ゆ。武王、之に病を示す。扁鵲、除かんと請う。左右曰く、「君の病は、耳の前、目の下に在り、之を除くとも未だ必ずしも已（いえる）えじ、將に耳をして聡ならず、目をして明ならざらしめんとす。」君以て扁鵲に告ぐ。扁鵲怒りて其の石（石鍼）を投じて、曰く（姚校：劉本は「石」の下に「曰」の字有り）、「君、之を知る者と之を謀り、而して知らざる者と之を敗る。使し此くのごとくにして秦國の政を知（つかさどる）らば、則ち君一舉にして國を亡ぼさん。」

五十八、秦武王謂甘茂曰

秦の武王、甘茂に謂いて曰く、「寡人、車、三川に通じ、以て周室を窺わんと欲す、而うせば寡人死すとも朽ちざらんか（名声が朽ちないだろうか）。」甘茂對えて曰く、「請う、魏に之き、韓を伐つを約せん。」王、向壽をして輔行（副使）せしむ。甘茂、魏に至り、向壽に謂えらく、「子、歸りて王に告げて曰え、魏は臣に聽けり、然れども願わくは王、攻むる勿れ、と。事成らば、盡く以て子の功と為さん。」向壽歸り以て王に告ぐ。王、甘茂を息壤に迎う。甘茂至り、王、其の故を問う。對えて曰く、「宜陽は大縣なり。上黨・南陽、之に積むこと久し（上黨・南陽からの租税や穀物が長年にわたって蓄えられている）。名は縣為れども、其の實は郡なり。今、王、數險に倍き（背にして）、行くこと千里にして之を攻むるは難し。臣聞く、張儀、西は巴蜀の地を并せ、北は西河の外を取り、

南は上庸を取れども、天下は以て張儀を多と為さずして先王を賢とせり。魏の文侯、樂羊をして將として中山を攻めしむ。三年にして之を抜く。樂羊反りて功を語る。文侯、之に謗書一篋（キョウ、篋は卷いた文書を入れておく長細い箱）を示す。樂羊再拜稽首して曰く、『此れ臣の功に非ず、主君の力なり。』今、臣は羈旅の臣なり。樗裡疾・公孫衍の二人が、韓を挟みて議せば、王必ず之に聽かん。是れ王は魏を欺きて、臣は公仲侈（韓の相）の怨みを受けん。昔者、曾子、費に處る。費人に曾子と名族を同じくする者有りて人を殺せり。人、曾子の母に告げて曰く、『曾參人を殺せり。』曾子の母曰く、『吾が子は人を殺さず。』織ること自若たり。頃く有りて、人又曰く、『曾參人を殺せり。』其の母、尚織ること自若たり。頃之（しばらく）して、一人又之に告げて曰く、『曾參人を殺せり。』其の母懼れて、杼（チョ、織機の横糸を送るもの）を投げ、牆を踰えて走れり。夫れ曾參の賢と母の信とを以てして、三人之を疑わしめば、則ち慈母も信ずること能わざるなり。今、臣の賢は曾子に及ばず、而して王の臣を信ずること、又未だ曾子の母に若かざるなり。臣を疑う者は適（ただに）に三人のみならじ。臣、王の臣の為に之れ杼を投ぜんことを恐るるなり。」王曰く、「寡人、聽かざるなり。請う、子と盟わん。」是に於いて之れと息壤に盟う。果して宜陽を攻むること五月にして、抜くこと能わざるや、樗裡疾・公孫衍の二人在り、之を王に争う。王將に之に聽かんとし、甘茂を召して之を告ぐ。甘茂對えて曰く、「息壤は彼に在り。」王曰く、「之れ有り。」因りて悉く兵を起し、復た甘茂をして之を攻めしめ、遂に宜陽を抜く。

五十九、宜陽之役馮章謂秦王曰

宜陽の役、馮章、秦王に謂いて曰く、「宜陽を抜かざれば、韓・楚、吾が弊に乗じ、國必ず危うからん。楚に漢中を許し以て之を歡ばしめんには如かず。楚、歡びて進まずれば、韓必ず孤なりて、秦を奈何ともする無けん。」王曰く、「善し。」果して馮章をして楚に漢中を許さしめ、而して宜陽を抜く。楚王、其の言を以て漢中を馮章に責（もとめる）む。馮章、秦王に謂いて曰く、「王遂に臣を亡せしめ、因（札記：今本「固」を「因」に作る）りて楚王に謂いて、寡人、固より地をして楚王に許したるもの無し、と曰え。」

六十、甘茂攻宜陽

甘茂、宜陽を攻む。三たび之を鼓うてども卒上らず。秦の右將に尉有り、對えて曰く、「公、兵を論ぜずれば（兵力を考えなければ）、必ず大いに困まん。」甘茂曰く、「我、羈旅にして秦に相たるを得るは、我、宜陽を以て王に餌（ジ、喜ばす）すればなり。今、宜陽を攻めて抜かざれば、公孫衍・樗裡疾、我を内に挫きて、公中は韓を以て我を外に窮しめん。是れ茂（札記：吳氏正に曰く、一

本「無茂」に作る、是なり）無きの日のみ。請う、明日之を鼓うちて下す可からずんば、因りて宜陽の郭を以て墓と為さん。」是に於いて私金を出だして、以て公賞を益す。明日之を鼓うちて、宜陽抜けぬ。

六十一、宜陽未得秦死傷者衆

宜陽未だ得ず。秦の死傷する者衆し。甘茂、兵を息めんと欲す。左成、甘茂に謂いて曰く、「公、内は樗裡疾・公孫衍に攻められ、而して外は韓侈と怨みを為す。今、公、兵を用いて功無くんば、公必ず窮せん。公、兵を進め宜陽を攻めんには如かず。宜陽抜けば、則ち公の功多し。是れ樗裡疾・公孫衍、事とする無からん。秦の衆盡く之を怨むこと深からん。」

六十二、宜陽之役楚畔秦而合於韓

宜陽の役、楚、秦に畔いて韓に合す。秦王懼る。甘茂曰く、「楚、韓に合すと雖も、韓氏の為に先ず戦わじ。韓も亦た戦いて楚の其の後に變ずる有らんことを恐る。韓・楚必ず相い御（うかがう）わんなり。楚、韓に與すと言うも、而れども怨みを秦に餘さじ。臣、是を以て其の御（ふせぐ）がんことを知るなり。」

六十三、秦王謂甘茂曰

秦王、甘茂に謂いて曰く、「楚客の來り使いする者多くは健（健は強）なり。寡人と辭を争い、寡人數々窮す、之を為すこと奈何せん。」甘茂對えて曰く、「王、患うる勿れ。其の健なる者來り使いせば、則ち王、其の事に聽く勿れ。其の需弱なる者來り使いせば、則ち王、必ず之に聽け。然らば則ち需弱なる者用いられて、健なる者用いられず。王因りて之を制せよ。」

六十四、甘茂亡秦且之齊

甘茂、秦を亡げて、且に齊に之かんとす。關を出でて蘇子（蘇代）に遇い、曰く、「君、夫の江上の處女を聞けるか。」蘇子曰く、「聞かず。」曰く、「夫の江上の處女に、家貧にして燭無き者有り、處女相い與に語り、之を去らんと欲す。家貧にして燭無き者、將に去らんとし、處女に謂いて曰く、『妾、燭無きを以ての故に、常に先ず至りて、室を掃い席を布く、何ぞ餘明の四壁を照らす者を愛しむや。幸いに以て妾に賜うとも、何ぞ處女に妨げあらん。妾、自ら處女に益有らんと以うに、何為れぞ我を去るや。』處女相い語り以て然りと為して之を留む。今、臣不肖にして、秦に棄逐せられて關をづ。願わくは足下の為に室を掃い席を布かん。幸いに我を逐う無かれ。」蘇子曰く、「善し、請う、公を齊に重くせん。」乃ち西して秦王に説きて曰く、「甘茂は賢人なり、恒士（平凡な士）に非ざるなり。其の秦に居ること累世に重んぜらる。穀塞・谿谷自り、地形の

險易盡く之を知る。彼若し齊を以て韓・魏を約し、反って以て秦を謀らば、是れ秦の利に非ざらん。」秦王曰く、「然らば則ち奈何せん。」蘇代曰く、「其の贄を重くし、其の祿を厚くし、以て之を迎うるには如かず。彼來らば則ち之を槐谷に置き、終身出だす勿れ。天下、何に従ってか秦を圖らん。」秦王曰く、「善し。」之に上卿を與え、相を以て之を齊より迎う。甘茂辭して往かず。蘇代（姚校：「秦」は一に「代」に作る）為（偽を為に改める）に王（齊王）に謂いて曰く、「甘茂は賢人なり。今、秦之に上卿を與え、相を以て之を迎う。茂、王の賜を徳とす。故に往かずして、王の臣為らんことを願う。今、王、何を以てか之を禮する。王若し留めずんば、必ず王を徳とせじ。彼甘茂の賢を以て擅に強秦の衆を得ば、則ち圖り難からん。」齊王曰く、「善し。」之に上卿を賜い、命じて之を處らしむ。

六十五、甘茂相秦

甘茂、秦に相たり。秦王、公孫衍を愛し、之と間かに言（『韓非子』により「立」を「言」に改める）う所有り。因りて自ら之に謂いて曰く、「寡人且に子を相とせんとす。」甘茂の吏、道にして之を聞き、以て甘茂に告ぐ。甘茂、因りて入り王に見えて曰く、「王、賢相を得たり、敢て再拜して賀す。」王曰く、「寡人、國を子に託す、焉んぞ更に賢相を得ん」對えて曰く、「王且に犀首を相とせんとす。」王曰く、「子、焉よりか之を聞ける。」對えて曰く、「犀首、臣に告ぐ。」王、犀首の泄せるを怒るや、乃ち之を逐う。

六十六、甘茂約秦魏而攻楚

甘茂、秦・魏を約して楚を攻む。楚の秦に相たる者屈盍、楚の為に秦に和す。秦、關を啓きて楚の使いを聽す。甘茂、秦王に謂いて曰く、「楚に怵（いぎなう）われて、魏をして和を制せしめずんば、楚必ず曰わん、秦、魏を鬻（ひさぐ）ぐ、と。魏（札記：鮑は「魏」の下に「魏」の字を補う）悦ばずして楚に合せん。楚・魏一と為らば、國は恐らく傷われん。王、魏をして和を制せしめんには如かず。魏、和を制せば必ず悦ばん。王、魏に惡しからざれば、則ち寄地は必ず多からん。」

六十七、涇山之事

涇山の事あり、趙且に秦と齊を伐たんとす。齊懼れ、田章をして陽武（齊の邑）を以て趙に合せしめ、而して順子を以て質為らしむ。趙王喜び、乃ち兵を案じて秦に告げて曰く、「齊、陽武を以て弊邑に賜い、而して順子を納れて、以て伐を解かんと欲す。敢て下吏に告ぐ（自分を卑下し、直接王に告げるのは恐れ多いので、吏を通じて告げる、と言う外交辞令で、実際に吏に告げているのでは

ない。」秦王、公子他をして趙に之かしめ、趙王に謂いて曰く、「齊、大國（趙）と魏を救いて約に倍けり。信恃（信用して頼りにする）す可からず。大國、義とせず、以て弊邑に告げ、而して之に二社の地を賜い、以て祭祀を奉ぜしむ。今又兵を案じ、且つ齊に合して其の地を受けんと欲す、使臣の知る所に非ざるなり。請う甲四萬を益さん、大國之を裁せよ。」蘇代、齊の為に書を穰侯に獻じて曰く、「臣、往來の者の言を聞くに、曰く、『秦且に趙に甲四萬人を益し、以て齊を伐たんとす。』臣竊かに之を弊邑の王に必して曰く、『秦王は明にして計に熟す、穰侯は智にして事に習う。必ず趙に甲四萬人を益し以て齊を伐たじ。』是れ何ぞや。夫れ三晉の相い結ぶは、秦の深讎なり。三晉百たび秦に背き、百たび秦を欺くも、不信と為さず、無行（節操がない）と為さず。今、齊を破り以て趙を肥やす。趙は秦の深讎なり、秦に利ならず。一なり。秦の謀者必ず曰ん、『齊を破り晉を弊して、而る後に晉・楚の勝ちを制せん。』夫れ齊は罷國なり、天下を以て之を撃つは、譬えば猶ほ千鈞の弩を以て癰を潰すがごときなり。秦王、安んぞ能く晉・楚を制せんや。二なり。秦、少しく兵を出ださば、則ち晉・楚は信ぜず、多く兵を出ださば、則ち晉・楚は秦に制せられん。齊恐れば、則ち必ず秦に走らずして、且に晉・楚に走らんとす。三なり。齊、地を割き以て晉・楚を實たさば、則ち晉・楚は安し。齊、兵を擧げて之が為に劍を鈍らさば、則ち秦反つて兵を受けん。四なり。是れ晉・楚、秦を以て齊を破り、齊を以て秦を破る。何ぞ晉・楚に智にして齊・秦の愚なるや。五なり。秦、安邑を得、齊と善くし以て之を安んぜば、亦た必ず患い無けん。秦、安邑を有たば、則ち韓・魏必ず上黨無からん。夫れ三晉の腸胃を取ると、兵を出だして其の反らざるを懼るるとは、孰れか利ならん。故に臣竊かに之を弊邑の王に必して曰く、『秦王は明にして計に熟す。穰侯は智にして事に習う。必ず趙に甲四萬人を益して以て齊を伐たじ。』」

六十八、秦宣太后愛魏丑夫

秦の宣太后、魏醜夫を愛す。太后病み將に死せんとし、令を出だして曰く、「我が葬を為さば、必ず魏子を以て殉と為せ。」魏子之を患う。庸芮、魏子の為に太后に説きて曰く、「死者を以て知る有りとなすか。」太后曰く、「知る無きなり。」曰く、「若し太后の神靈、明らかに死者の知る無きを知らば、何為れぞ空しく生きて愛する所を以て、知る無きの死人に葬らんや。若し死者、知る有らば、先王、怒りの日を積むこと久し、太后、過ちを救いて贖（たる）らじ（主人に対する過ちを取り繕うのに手一杯であることを言っている）、何の暇あつてか乃ち魏醜夫を私せんや。」太后曰く、「善し。」乃ち止む。